大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

表紙のことば：水仙

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 輝幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/00017924

表紙のことば　―水仙―

久保輝幸

春が近づくなか、まず梅花が咲き、地上では霜が降りなくなった頃を見計らって、水仙が葉を伸ばし、花を咲かせる。梅や水仙は、それらが異国の花であったことを感じさせないほど日本の文化と融合している。中国では、寒空に雪に耐えて咲かせる水仙の姿に高潔さを見い出さたのは南宋の頃であった。以来、水仙は文人画で描かれる題材となり、16 世紀末の張謙徳『瓶花譜』に至って、牡丹や梅などと並び最上位の「一品九命」に置かれるようになった。しかし、水仙は元々、地中海沿岸が原産地で、東西交流が盛んだった唐代に中国に伝わったことはあまり知られていないかもしれない。

名前の由来は、通説では天仙、地仙に対し、水にいる仙人を水仙ということから、それにちなんで名づけられたとされ、それは Wikipedia などにもみられるが、根拠は示されていない。仙人としての「水仙」は、例えば『北夢瑣言』に次の記載がある。幽州の張建章(806-866)が渤海国王の大彝震に使いする際(834 年にあたる)に、船が水難に遭い、女仙の召使いに救われたうえ、その歓待を受け、水に浸かっても濡れないという伝説の鮫綃を贈られたという話を聞いたとある。

この『北夢瑣言』の編者孫光憲(?～ 968)は、後唐により交易路の要衝、荊南の副節度使に任じられた人物である。孫光憲は又、段公路（一作璐）の『北戸録』に続注を加えて、荊南領内に寄寓していた外国商人の穆思密が「水仙花」を水栽培で育てる様子を孫光憲自身が目にして驚嘆したことを記す。以上から、孫光憲は「水仙」を女仙とし、「水仙花」を植物名としていたことが分かるが、とくに「水仙」と「水仙花」の関連には触れていない。

段公路の父、段成式は 9 世紀中頃に『酉陽雑俎』を著し、「捺祗」という外国語名で水仙を最初に中国で紹介した人物だが、その頃まだ「水仙花」という名もなかったようだ。宋代では水仙は主に「水仙花」と呼ばれていた。同時に、水仙を黄庭堅は凌波仙子とも称される洛神に、楊万里は漢水の江妃二女にそれぞれ喩えた作品を残している。これらは水仙という名とその姿から連想されたもので、語源の根拠にはなりえない。

では、なぜ「水仙花」と名づけられたのか。湯浅浩史先生や南京師範大の程杰先生はギリシア神話に登場する美少年ナルキッソス(Narcissus)との関連を指摘する。水仙は英語で、daffodill や narscissus と呼ばれる。後者がナルキッソスと関連する点は疑う余地がない。ナルキッソスが溺死した後に水仙が生えたという話もあるので、ナルキッソスが仙人に置き換わったらしいと推定なさっている。

古代ギリシアでは水仙が動物の神経を麻痺させる作用をもつことが知られており、薬用に供された。デオスコリデス『薬物誌』やプリニウス『博物誌』などに記載がある。そのため、麻酔剤 narcotic も同根であるが、どれが語源で、どれが派生語であるのかを明らかにできるほどの史料も残っていない。

また、水仙の日本への伝来時期も不明と言わざるを得ない。磯野直秀先生の「明治前園芸植物渡来年表」(2012 年改訂版）によれば、1444 年の『下学集』に「水仙花」とあるのが今のところ本邦最古の記載である。ただ、これは古辞書の記載であり、厳密にいえば初めての渡来を証明するものではない点にも注意したい。異国の風物詩として植物の名称だけ先に伝わった可能性もあるし、15 世紀より前に渡来し好事家が栽培していたとしても、それは取り立てて記録するものではなかったかもしれない。

このように謎の多い水仙は地中海生まれでありながら、中国や日本の伝統文化に馴染み、古典園芸植物の一員となっている。水仙はその名に違わぬミステリアスな経歴の持ち主といえよう。

装丁　SASAKI Hiromitsu, XING Che